



# まる ○福連携2021

一般社団法人福祉システム北海道

高橋 銀司代表理事

福祉分野からみた異業種との対話 □連載2□

## 空間工作所一級建築士事務所 神谷 幸治氏



かみや・ゆきはる 1977年、江別市出身。北海学園大工学部建築学科卒業。東京都、札幌市内設計事務所で経験を積み一級建築士を取得。2016年に栗山町で独立し、一般住宅をはじめ、店舗ほか、20年に千歳市内認知症グループホームも設計。同年から同大非常勤講師を務める。

### ●GHでそうした予測がつかない動きに対応した事例はありますか。

今回のGHに関しては窓の選定配置がその一例です。福祉施設の居室の大半は通常、両側を引いて開けられる引き違い窓を採用される場合が多いです。採用することで法規上、必要な排煙窓をこの窓1つで兼ねられるなど合理的である半面、窓が比較的大きく開くため利用者が勝手に外に出てしまう危険性もあります。これを回避するため、あえて排煙窓を別に設け、その下に大きくは開かない開き窓を採用しました。これにより窓からは出づらくなっています。このような形態を採用している福祉施設はあまり多くないと思います。

### ●建築家の立場からみて、福祉や介護の世界はどういう印象ですか。

私は福祉や介護の世界を間近で体験しているわけではないため、関わった施設建築物の側面からの話になりますが、福祉施設はいま、地域住民など外部に開放したいという思いがありながら、同時に立地や防犯、管理面から難しい点があります。ここがうまく解決し、より地域との接点、町との関わりを増やせると良いなと感じました。今回設計したGHは住宅街に面し、GHの機能のほかに地域交流スペースを併設しています。地域の方が気軽に立ち寄り、お茶を飲みに行くような感じで利用できる場所にしたというクライアントからの要望でした。実現した交流スペースは残念ながらこの状況下、一般開放できていませんが、どのように地域に開放されていくのか、実現を心待ちにしています。もう1つ福祉分野で感じた点は、法規の種類が多く、難解に感じる点です。新しい分野だから仕方ないのですが、比較的速いスピードで多岐にわたる法律が改正されていく、そこについていくのが大変でした。

### ●施設として内部が見えづらい部分があったという感じでしょうか。

そうですね。もっと身近に触れ合える場であれば、介護というのを意識しやすいのですが、接点がないと「介護者が利用者を介護している」という漠然としたイメージで終わってしまいます。日常の生活において触れ合える場であれば、当事者ではない人にも問題意識が生まれますし興味も持ってもらえます。今回GHを設計してみて、よりその部分が大きく感じるようになりました。ものづくりの場においてDIYなど自分で関わることで大変さや面白さがわか

### ■あしがき：高橋銀司

介護福祉士資格を保有していると、福祉用具専門相談員としても認められています。近年、福祉工学の発展により、「自動リクライニング電動車いす」「格子状の手すり」など、さまざまな場面で「誰もが快適に過ごせること」への実現に向けて日々動いていることを実感します。GH建築設計も手掛けた神谷さんは設計する際、車いすや認知症の方でも気持ち良く過ごせる環境づくりに着目し、法律で定められている基準以上に余裕を持った設計を心掛けている

ってくると思います。そういう気楽に体験できる部分が福祉や介護に出てくると面白いと思います。

### ●仕事の面で今後、福祉とコラボできるかなと感じていることはありますか。

常に福祉と結びつくのかなと思っています。住宅設計の場合でも老年になった際のことをある程度は視野に入れながら設計します。ただ、いわゆるバリアフリーにするのではなく、クライアントそれぞれの状況や考え方を踏まえつつ検討します。例えば、段差のない方が良いと言われますが、全くなすと足の機能が退化する恐れもあります。つまり、恐れのある小さな段差は避ける形が多いですが、腰掛けながら移動できるような大きな段差などは取り入れられることがありますね。

### ●階段の上り下りも老化しないための1つのリハビリですね。

以前、設計した住宅の1つに室内の高さが4層に分かれたスキップフロアの住宅があります。半地下の収納室、1階に玄関や個室、中間階に居間、2階に水回りを配置しています。居間を生活の中心とすれば、1階と2階に対する上り下りの距離は通常の2階建て建物より高さの距離は短くなります。距離を短くすることで上り下りの大変さを少し和らげられるのではという考えでした。そのため、段差は非常に多く、そういう意味ではバリアフリーではないのですが、障害をなくすというよりも、少なくとも判断をします。住宅は一生の間を過ごす時間長いものです。その中でどれが最適なかは住む人それぞれで違ってきます。対話を重ねて魅力的な最適解を提案し実現させていくことが私の仕事の1つになります。



模型を使って建築について説明する神谷氏



CGで具体的な設計を確認する

### ●建築家とは具体的にどのような仕事ですか。

実務的な面で言いますと、クライアントと作り手側をつなぐガイドの役割があります。クライアントの要望、敷地の気候風土、周辺環境、建築基準法をはじめとした法律など、さまざまな側面を同時に考え、形にしたものを図面に描き起こして提案します。打ち合わせを重ねながら内容を成熟させていき、最終的にできた図面を工務店などに渡します。図面に表現される意図、工法、材料、納まりを打ち合わせしながら決定し、金額が合わない場合は工法の合理化や材料選定の見直しで調整します。工事が始まってからも図面と相違がないよう常に現場と情報共有し、問題が発生した場合は対処しつつ完成まで見続けます。建物の最初の思考段階から出来るまで、以降も関与していく仕事となります。

### ●仕事上で大切にされていることはありますか。

対話です。文章や図面などで、意図はある程度伝わるのですが、ニュアンスなど細かな部分でうまく伝わらない場合があります。対話を重ねてクライアントや作り手と共有していくことが大切だと感じています。

### ●うまくコミュニケーションとれないこともありましたか。

若い頃はそのような経験もしました。説明が不十分であったり、細かい部分でイメージの違いがあったりしました。

### ●詳しく話せば食い違いは生じないものでしょうか。

いくら対話を重ねても、決定事項の多い建築では食い違いが生じる場合があります。それを少しでも減らすためCG、建築模型を使用します。自分のイメージを検討するために設計上、必要な道具でもあります。クライアントにイメージを説明する道具としてもとても役に立ちます。

### ●千歳市のGH設計もされたとのことですが、建築家の仕事に福祉的要素はありますか。

それもコミュニケーションではないかと思えます。GH設計の際も、事業者と逐一对話しながら物事を決めていきました。事業者と利用者が常にコミュニケーションをとって信頼関係を構築していくように、私の仕事もお互いの共通認識をつかんでいくこと、分野は違えどやっているのは一緒ではないかと思っています。何が必要であるかを現場の声を聞き、議論を重ねながら設計したからこそ細かい部分にも配慮できた建築ができたのではないかと感じています。

### ●GHを手がけていた最中に、一般的な建築と違う気づきがありましたか。

人の動きに対して、より注視するようになりました。特に認知症の方の場合、突然外に飛び出していかれたり、予測のつかない行動をされる場合があります。そういう場面を想定してどう対策をとるのかを考えなければなりません。もちろんどのような建築でも人の動きに対しては考えますが、日常にないような想定外の動きへの対応、対策は新鮮でした。